入試制度

選抜方法・方式

入試の多様化と受験機会の複数化を要望する声が一般社会において高まってきたが、こうした問題意識を入学者の選抜方法・方式の研究において取り上げた大学が次のように見られる。(1)推薦入学・社会人特別入試について受験者・合格者の実態調査（富山）(2)外国で受験資格を取得した者の特別入試・学士入学に関する調査（京都）(3)私費外国人留学生の特別入試は極端に複数受験が可能なためか入試欠席や入学辞退が多いなどの検討（岐阜・小柳洽）(4)2次募集の効果など商船大学特有の要素と入試の関係の調査（神戸商船）(5)入試方法・学科・教育内容等について高校教師に対する意識調査（東京商船）(6)新入生と4回生を対象に入試改善のためのアンケート（京都教育）など。昭和62年度から受験機会が複数化されたが、これに関する調査も少なくなかった。

入試教科・科目

各大学・学部が数個の教科・科目や小論文等を組み合わせて、2次試験を実施しているが、どの組合せが最適であるのか、関係者いずれもが関心を寄せるところであろう。これを探る方向として、次の3種類が見受けられる。——(1)入学者の実態・意識調査……選択制、問題の難易、得意・不得意の科目（新潟）、教科・科目数についての意見、問題の難易（京都工芸繊維）。(2)小論文を新たに課したことの影響……合格最低ラインに変化が生じた(山口)。(3)入学者の学力構造を、60年度と61年度の共通1次の各教科の得点を資料として、主成分分析の手法により解析した研究……国語・社会・英語の得点が高いほど、かつ数学・理科の得点が低いほど、成分の値が大きくなる第1主成分（文科的能力に関わる成分)、理科・数学の得点が高いほど、成分の値が大きくなる第2主成分（理科的能力に関わる成分)、英語の学力に関わる第3主成分（61年度は英語と数学に関わるものであった）に分析され、60年度の寄与率は、第1主成分が約30%、第2主成分が約27%、第3主成分が約17%であった（東京農工)。

試験問題・出題形式

入試の在り方を検討する時、受験生にとって最も身近かであり高校教育への影響が大きいことの一つは、試験問題の範囲・内容・水準・出題形式などの点である。この点に関しては、次の諸研究がなされている。——(1)共通1次と2次試験の教科・科目数、試験問題の内容・水準等に関し、新入生と4回生を対象とする意見調査……多くは現状を肯定していた（京都教育)。(2)2次試験の試験問題について、自県内の高校20校における担当教員の意見調査……62年度試

験問題について、出題範囲・出題形式が「不適当」と「やや不適当」の計は約10%ずつ、難易度が「難しい」は約20%で、おおむね適切であった(弘前)。(3)共通1次英語試験問題の分析……過去10年間の出題傾向を概観し、63年度試験問題を逐一分析した(山口)。(4)共通1次を素材に「良質な試験問題とは具体的に何を指すのか」と「実際の試験問題では受験生の何を測り何を測っていないのか」との二つの問いに基づく試験問題の定性的分析……国語・評論文問題を具体的に分析した(大学入試センター、池田輝政ほか)。(5)共通1次の数学試験問題について、解答過程において働いている思考力の分析……①数学的概念・定義の理解——記憶、意味把握、②問いの理解と問題解決のための条件の発見——推論、洞察力、③演算——計算力、緻密さに分析し、具体例として54・59年度の2問題を材料として考察した(大学入試センター、岩坪秀一)。(6)私費外国人留学生の学力試験問題の検討……①日本国際教育学会による統一試験と本学の学力試験には高い相関がある、②日本語の成績がある点数以下になると、出題の意味自体の理解が不十分となるため、全科目の成績が低くなる。とりわけ外来語のカタカナ表示に問題がある(東京農工)。

入試実施組織

複雑化し多様化しつつある大学入試の業務を担当する学内組織はいかにあるべきか。臨教審答申は、「各大学の入試担当機能の強化」とか「アドミッションズ・オフィス(入試担当部門)の設置または強化」を提案した。東京工業大学は文部省の委託を受けて、学内外15名から成る「大学入学者選抜に関する学内組織の在り方に関する調査検討会」を設け、61・62年度の2年間調査検討を行った。61年度は米国の大学におけるアドミッションズ・オフィスの調査と国内の国公私立大学アンケート調査を行った。62年度は国内調査の分析と学内組織案の作成を行った。この研究の詳細は「大学入学者選抜に関する学内組織の在り方に関する調査研究」(昭和63年3月、同大学)に報告された(東京工業、柳沢健)。

入試制度の改革

受験機会の複数化実施に伴い、各大学で複数化と直接・間接に関連する事項その他について、その大学の入試制度を総括的に検討し、改革案を構想する試みが各地に見られる。複数化に関係する事例は、その項に譲り、ここでは次の2大学の試みを紹介する。——(1)山口大学では、「理想とする大学像・大学教育と入学者選抜制度」研究グループが継続的な研究を続けている。63年度は新入生を対象に「共通1次試験・山口大学の入学者選抜方法に関する1988年度入学生の認識実態調査を行った。(2)福島大学経済学部入試問題検討委員会は、「入学者選抜方法の改革について(第1次報告)をまとめた。それは①共通1次全般の総括、②共通1次下での各大学の入学者選抜方法の総括、③入学者選抜方法の改革案から成っている。

外国の大学入試

大学入試センター研究開発部の試験制度研究部門等は、数年来各国の大学入試の比較研究を実施し、61年には「世界の大学入試」（時事通信社刊）を発表した。62･63年度には、「諸外国の大学入試等に関するシラバス及び試験問題の国際比較研究」（科学研究費による）を続け、62年度には「諸外国の大学入試基準」と題する研究中間報告書を発表した。

大学教育・高校教育

大学入試は、大学における教育の入口での関門を意味すると同時に、高校教育の修了直後からの接続点に当たる。従って、入試を考えるには、その前後にある大学教育と高校教育との関連の探求が不可欠である。今回は、次の諸研究が報告されている。

大学教育・一般教育

各大学がその教育の在り方を客観的に評価しようとする時、卒業生や在学生の評価に耳を傾けることは有力な一方法である。浜松医科大学では、過去９回の全卒業生に対するアンケート調査を行い、540通（63%）の回答を得て結果をまとめつつある。その内容は、総論（教育の在り方、基礎研究と臨床研究、大学のレベルを高めるには等々）と各論（カリキュラム、学生生活一般等々）に分けられている。同大学では、このほかに高校時代の成績・活動状況、入学時と在学中の成績、学生生活・活動状況等をも考慮した追跡調査がなされている。京都教育大学では、４回生に対する調査を行ったが、概略次のような結果であった。①講義内容に対する満足度は高くない。②実験・実習・演習に対する満足度はやや高い。③自主的な勉学はあまりできなかったとの答が多い。④クラブ活動には比較的満足している。⑤交友関係に対する満足度は高い。⑥アルバイトは、９割以上が実施しており、「勉学と両立する」とする者が多い、等々。また、ある大学では２回生全員に対するアンケート調査で、入学前の「期待」と入学後の「満足」の度合いを調べ、入試成績、１年次の成績との相関をも分析した。結果のまとめの中には、入学前の期待度はかなり高いのに対して、入学後の満足度はやや低めであり、意欲ある学生を「招き寄せる」には学内の充実をさらに必要とするとの反省も見られた。

筑波大学では、その一般教育の特色としている「総合科目」「国語」「情報処理」に、「外国語」の授業を加えて、これらについてのアンケート調査を学生を対象として実施した。